

工部大学校お雇いスコットランド人教師ヘンリー・ダイアー
——「努力立身」の生涯——

加藤 詔 士

目次

- 一 日本教育の開国と外国人教師
- 二 「鍛冶屋の子」
- 三 『国勢調査』のなかのダイアー
- 四 徒弟修業
- 五 夜間学級
- 六 グラスゴウ大学ホィットワース奨学生
- 七 「努力立身」の生涯

一 日本教育の開国と外国人教師

(一)

近代日本の開国のさい、多数の外国人が関与した。近代教育の成立過程においても、大勢の外国人教師が貢献した。西洋教育のモデルをもって来日したかれらは、教育の実践、学校の経営、学事にかかわる献策などという職務をとおして、日本教育の近代化と自立化を促進したのである。

外国人教師による近代日本教育の推進は、種々の領域において認められる。とくに注目されるのは下記の四点である。

第一に、専門教育機関の編制ならびに教育を先導した点において大きな寄与をした。日本開国のさい、「国家富強のためには実学人材が必要である」という考え方から、まずもって専門教育が組織化された¹⁾のである。官立では文部省の開成学校ならびに東京医学校、工部省の工学寮および工部大学校、開拓使の札幌農学校、司法省の法学校、内務省の駒場農学校、公立・私立では、舎密局、商法講習所、慶応義塾、三菱商船学校などにおいて、洋学を身につけた実学人材の育成という期待にこたえた。

第二に、国民教育の充実という政策課題にもこたえて、師範教育、体操教育、唱歌教育、女子教育などの組織化を指導した。

第三に、あたらしい女子教育観の形成に寄与し女学校を率先して設立することをとおして、女子教育の近代化に大きな役割を果たしたことも注目される。

第四に、地方にある公立・私立の学校教師となって赴任し、その地の文教ならびに勸業の近代化を進めた功績も忘却できない。⁽²⁾

(11)

ヘンリー・ダイアー (Henry Dyer, 1848—1918) は右の四領域のうち、第一の専門教育の推進にかかわり、日本教育の開国のさいに顕著な実績を残した。具体的には、工業技術の近代化を先導した工部省のお雇い教師としてスコットランドから来日し、明治六(一八七三)年から一五(一八八二)年まで、工学寮ならびに工部大学校の都検(教頭)として、また土木・機械工学教授として工学教育にたずさわり、工学専門教育の組織化に貢献した。実学重視という工学教育理念を日本に残したし、工学部を草創期から大学のなかに位置づけるという日本工学教育制度の生みの親であるといってもよい。⁽³⁾

工部省お雇い教師としての右のような活動にたいし、政府は勲三等旭日中綬章を贈与して、その功労をたたえた。賞勲局編『外国人叙勲録』(明治二五)では、英国における民間人のなかでの最高位であった。⁽⁴⁾ 明治一五(一八八二)年四月六日、工部卿佐々木高行が作成した賞勲局総裁三條実美への伺い書によれば、工部大学校の「創業以来殆ト十年間格別ニ勉勵盡其職功勞不少候」というのが推薦事由であった。この叙勲伺いに添えられたダイアーの「奉職履歴概略」には、つぎのようにある。

「工部大学校都検ヘンリー、ダイエル氏ハ英国ノ工学博士ニシテ我政府ノ招ニ応シ明治六年六月三日東京ニ著シ工部卿ノ命ヲ奉シ工学寮都検ノ職ニ任ス抑工学ハ本朝未曾有ノ事業ニテ当時学舎ノ設学課并諸規則等一二同氏ノ責任ニアリ故ニ同氏非常ノ勉勵ト多年ノ学識ヲ以先ツ学課并諸規則ヲ撰定シ而シテ又校舎ノ構造教場ノ位置等ヲ

計画シ及ヒ工学ニ関スル一切ノ器械書籍ヲ装置スルノ準備ヲナシ注意周到耐忍能ク勤ム経営日ヲ追テ稍竣リ生徒年ヲ積ンテ増殖シ其専門科ヲ分ニ及ンテ身親ラ土木機械ノ二科ヲ教授シ且ツ各科教師ヲ統率スルヲ以テ各教場ヲ巡視スルノ日ニ数次風雨ノ氏ト雖トモ曾テ怠ルノアラス……其生徒ヲ視ル子ノ如シ新旧ニ論ナク苟モ異常アレバ則親問示諭至ラサルナシ故ニ生徒皆思フテ之ヲ敬ス明治六年ヨリ本年ニ至リ殆ント十年間終始一日ノ如シ故ニ教師ハ勉メザルナク生徒ハ惰ル者稀ナリ此皆同氏薰陶ノ致ス所然リ而シテ都検ヘンリー・ダイエル氏工部大学校創業ノ功勞當ニ今日ノ觀ニ止ラス将来我邦国ノ利益少ナカラサルナリ^⑤」

なお、ダイアーはお雇い教師としての功勞にとどまらず、帰国後も日本との關係を保ちつづけ、日英の交流と親睦の増進に尽力したことも忘れてはならない。その活動もまた顕著な実績を残したことで、明治四一（一九〇八）年二月には、勲二等に叙せられ瑞宝章が贈与された。その功勞調書には、帰国後も「本邦ヨリ英国ニ渡航スル諸学校教授文部省留学生等ニシテ同国ニ滞在中同人ノ為メ種々盡力ヲ受クルモノ尠ナカラス殊ニ日露戦役中ハ終始克ク帝国政府ニ対シ好意ヲ表シ絶ヘス有益ナル諸報告ヲ為シ大ニ利益ヲ與フル等其功勞顯著ナリ^⑥」と記されている。

二 「鍛冶屋の子」

ダイアーはお雇い教師として招聘され、工学寮ならびに工部大学校という工学専門教育機関の都検（教頭）ならびに土木・機械工学教授として、同校の経営を担当し教育を指導したし、工学専門教育の組織化に貢献した。前出の功勞調書にあるように、「工学ハ、本朝未曾有ノ事業」であっただけに、かれは「学課並諸規則ヲ選定」すること

のほか、「校舎ノ構造教場ノ位置等ヲ計画シ、及ヒ工学ニ関スル一切ノ器械書籍ヲ装置スルノ準備」も期待され、これらを見事になしとげた。

教師であるうえに、教師の筆頭である教頭として学校の組織と管理も担当したそのダイアーの出自について、「鍛冶屋の子より努力立身の人」であつたということが、学生のあいだで広まっていた。立身できたのも「蘇蘭土の工業学校にて学業優秀を以つてウィットウォルス懸賞学生に挙げられた」ことによる、ということも知られていた。

ウィットウォルス懸賞学生とは、機械工作技術の発明・改良において指導的役割を果たしたJ・ホイットワース (Joseph Whitworth, 1803—1887) が、その発明・改良でえた財を投じて一八六八年に創設した基金による奨学生であつて、毎年三〇〇〇ポンドの寄贈金をもとにして、「機械学の理論と実践」にすぐれた者三〇名に一人あたり年間一〇〇ポンドの奨学金が与えられた。これによって、貧しい技術者でも高等教育への道が開かれることになった。ダイアーはグラスゴウ大学生であつた一八七〇年にスコットランドで最初の奨学生に選ばれ、三年間、この奨学金をもらうことができたのである。⁹⁾「成績の良き生徒が其の選に当るのでウィットウォルス・スコラーと云へば名譽の人」であつた。ダイアーは、そのほかにも輝かしい学業成績を残している。たとえば、後述のように、一八七二年度には初級物理学奨励賞とでもいえるアーノット賞に輝き、一五ポンドを支給されている。工学・造船学でウォーカー賞、天文学でワット賞などを受賞した記録もある。

ダイアーがお雇い教師として在任していたころといえ、S・スマイルズ著『セルフヘルプ』(一八五八)が『西国立志編』(明治四)と題して訳出され、青年を鼓舞していたころであつた。志を立て倦まずたゆまず努力することが立身出世につながることを説いた、同書が大ベストセラーとなつただけに、¹⁰⁾ダイアーも立志伝中の人物として崇められていたのであろう。学生にはそう映つたにちがいない。

三 『国勢調査』のなかのダイアー

(一)

ダイアーははたして「鍛冶屋の子」であったのか。『国勢調査 (Census)』によれば、後述のように、たしかに父は「鑄造場の労働者」であり、祖父は鉄工所の「溶鉱炉番」であった。しかも、働き口を求めて、何回か住所を変わっている。ダイアー自身はグラスゴウ大学に在学中、いずれの年も、同大学の『学生名簿 (Glasgow University Album)』の「父の職業」欄に「エンジニア」と届けていた⁽¹²⁾が、実際は高度な技能をもった熟練工であったとは思われない。「ヘンリー・ダイアー家の出は低く、ダイアー自身の家柄は裕福な家でも名家でもなかった」と思われる⁽¹³⁾。家族の素性と住所、ダイアーの教育歴について、もう少し具体的に考察する。

まず、父ジョン(一八二二—一八九一)についてみると、かれの出生地はスコットランドではなくてアイルランドであった。『一八四一年国勢調査』によると、住所はアイルランド東部のコーク州キャンバスネサンのウィッシュョーというところにあった。職業欄には「会社勤めの肉体労働者 (Com. Lab.)」とある。家族は九名で、ダイアーの祖父ヘンリー(四五歳、軍人恩給受給者)、祖母メアリ(四五歳)、それに長男である父ジョン(当時一八歳)以下七名の子ども(一五歳および六歳の弟、一〇歳の双子の妹、三歳および二歳の妹)という構成である⁽¹⁴⁾。(祖父ヘンリーは軍人であったとあるが、そのごは「鉄工所の溶鉱炉番 (furnace keeper)」として働いた⁽¹⁵⁾。)

それが、『一八五一年国勢調査』の記録になると、住まいはスコットランドのグラスゴウに変わっている。同市ラナークシャのボスウェル区ミアマドキン村(現在はベルシル町に併合)エディンバラ通三二番地という住所であ

り、アイルランドから移住してきたのである。⁽¹⁶⁾ おそらく働き口とよい暮らしを求めての移住であったにちがいない。このとき、父ジョンは二九歳。職業は「鑄造場の労働者 (foundry labourer)」であった。母マーガレットは二八歳。地元ボスウエルの「農夫兼配達人」ロバート・モートンの娘であり、一八四八年に結婚した。⁽¹⁷⁾ 二人の長男がヘンリー・ダイアーであり、当時二歳であった。つづいて長女ジャネット(『一八五一年国勢調査』では六か月)が誕生した。下宿人一名(二一歳)⁽¹⁸⁾ も記録されている(表1参照)。

表1 『1851年国勢調査』におけるダイアー一家

No. of Householders Schedule	Parish of Bothwell	Name and Surname of each Person who abode in the house, on the Night of the 30th March, 1851	Relation to Head of Family	Condition	Age of		Rank, Profession, or Occupation	Where Born	Whether Blind or Deaf and Dumb
					Males	Females			
32	Edin. Road	John Dyer	Head	M.	29		Foundry labourer	Ireland	
		Margaret Do	Wife	M		28		Lanark Bothwell	
		Henry Do	Son		2			Do Do	
		Janet Do	Daug.			6m		Do Do	
		Thomas Watt	Lodger	U	21		Stocker	Stirling Falkirk	

エイトキン社 (James Aitken & Co.) という鑄物工場であつて、「巨大船舶用ボイラーの製造を専門とした」⁽²⁷⁾。おそらくダイアーが同社での徒弟修業するのを機に、ダイアー家はグラスゴウに転居した⁽²⁸⁾。

一八七一年の『国勢調査』になると、住所はグラスゴウ市セント・ヴィンセント通四四九番地に移っている。セントラル駅西方の、クライド川右岸に広がる造船所地帯の北側にあたる。父の職業欄には「エンジン整備工 (Engine fitter at Works)」とある。ダイアーは二二歳、「教養課程の学生 (Arts Student)」と記録されている。同所よりグラスゴウ大学に通っており、入学した一八六八年から毎年この住所を大学に届けている⁽²⁹⁾。

一八七三 (明治六) 年になると、日本政府に招へいされグラスゴウをあとにするが、ダイアー不在中の父母の住所はグラスゴウ市ダンバートン通二八番地であつた。グラスゴウ大学近くの、ケルピングローブ地区の西端にあたる。『一八八一年国勢調査』では、父ジョン (五八歳) は退職しており、「退職したエンジン整備工 (Retired Engine Fitter)」とある。母マーガレット (五八歳) と下女 (二〇歳) の三名で暮らしている⁽³⁰⁾。

(三)

日本でのお雇い教師の任務を終了し帰国すると、ダイアーは、まずレンジイ (Lenzie) に居を構えた。グラスゴウ市内から北東へ一二キロほどにあり、一八四二年にエディンバラ・グラスゴウ鉄道が開通し駅が開設されたのにもない開けた町である。一八五〇年代に、鉄道会社がレンジイ駅近くにグラスゴウへの通勤者用の住宅を建て、住民には無料の定期券を支給した。しかも、一八七〇年代に水道施設が完備されたことで、通勤者用住宅地として一段と発展することになる⁽³¹⁾。ダイアーもここに家を求めたのである。

その家は、レンジイ駅の南側の、林に囲まれた広々とした屋敷のなかに今も残っている。半円形の窓を配した、

クラシックスタイルの家である。同型の家屋が並んでおり、確かにここは郊外住宅として建てられたと思われる。ここに、妻 M・E・A・ファーガソン (Marie Euphemia Aquart Ferguson, 1848—1921) と、日本滞在中に授かった三男一女、それにおそらく両親と、一緒に過ごした⁽³²⁾。

それから今度は、一八八五年もしくは一八八六年ころ⁽³³⁾、グラスゴウ市内のハイバラテラス八番地に転居した。グラスゴウ大学のすぐ西北の地、現在のハイバラロード五二番地にあたる。ここがダイアーのついのすみかとなる⁽³⁴⁾。屋根裏部屋と半地下付きの二階建のタウン・ハウスで、裏には古木の茂った庭園があった⁽³⁵⁾。『一八九一年国勢調査』によると、窓付きの部屋が一二室あった⁽³⁶⁾。ダイアー夫妻と四人の子ども、ダイアーの両親、それに下女二名の、総勢一〇名という大家族であった。かれダイアー (四二歳) の職業は「土木技師 (Civil Engineer)」、父ジョン (六八歳) は「退職した機械技師 (Retired, Mechanical Engineer)」とある。なお、四人の子ども (チャールズ一四歳、ロバート一二歳、ジェイムス一〇歳、マリー八歳⁽³⁷⁾) の出生地は「日本の東京 (Tokio Japan)」と記されている⁽³⁸⁾ (表 2 参照)。

ハイバラテラス八番地にあったこのタウン・ハウスは、日英交流が促進された拠点であったという点で注目される。第一に、田邊朔郎 (一八六一—一九四四) や曾禰達蔵 (一八五二—一九三七) ら工部大学校の卒業生、あるいは岩崎久弥 (一八六五—一九五五) ら日本産業の指導者らが訪問し、旧交を温め指導を請うたのである⁽³⁹⁾。第二に、日本での体験を生かしてグラスゴウの教育改革を推進したほか、日本研究、日本人グラスゴウ留學生の支援、日本政府の帝国財政及工業通信員などにみられる、日英交流の推進者としての活動⁽⁴⁰⁾は、ここを拠点に展開されたのであった⁽⁴¹⁾。

表 2 『1891年国勢調査』におけるダイア一家

Page

The undermentioned Houses are situated within the Boundaries of the

No. of Schedule	ROAD, STREET, &c. and No. or NAME of HOUSE	HOUSES		NAME and Surname of each Person.	RELATION to Head of Family.	CONDITION as to Marriage	AGE (last birthday)		PROFESSION or OCCUPATION	Employer	Employed	Neither Employer nor Employed, but Working on own account	WHERE BORN	Caelic or G. & E.	Whether 1. Deaf and Dumb or 2. Blind Luratic, Imbecile or Idiot	Home with One or More Windows
		Inhabited (A) or Building (B)	Uninhabited (U) or Building (B)				Males	Females								
168	8 Highburgh Terr.	1		Henry Dyer	Head	Mar.	42		Civil Engineer			1	Lanarkshire Bothwell			12
				Marie F. Do	Wife	Mar.	43		Scholar				West Indies, St. Lucia			
				Charles H. Do	Son		14		Scholar				Tokio Japan			
				Robert. Do	Son		12		Do				Do Do			
				James F. Dyer	Son		10		Scholar				Tokio Japan			
				Marie F. Do	Daur		8		Do.				Do Do			
				John Do	Father		68		Retired, Mechanical Engineer				Ireland Dublin			
				Margaret Do.	Mother		68						Lanarkshire Bothwell			
				Christine Cooper	Serv.		40		Domestic Servant				Aberdeenshire Aberdeen			
				Janet Armit	Serv.		7		Do Do				Lanarkshire Cambusnethan			

四 徒弟修業

ダイアーはグラスゴウ大学の出身だが、入学前に徒弟修業をした体験の持ち主でもあった。大学に学んだだけでなく、徒弟となって実地の修業をしたという経歴は注目される。工部大学の都検（教頭）として、理論学習と実習をむすびあわせたサンドイッチ・コースという特色ある教育課程を構想し具体化したのも、そのような経歴と関係があるように思われる。

実際の現場とのかかわりは、すでに少年のころにはじまっていた。まず、前記のように、ショッツに居住し、父が働くショッツ鉄工所に付設されたウィルソン学校に学んだ。当時の教師 R・マクナブ (Robert M. Nab) のように、ダイアーは

「たぐいまれな忍耐力と勤勉さをみせました。しかも、すばらしい記憶力と最高の天性の才能とが加わって、かれがいるどのクラスでも第一位を占めることができましたし、毎年の試験でもすべて一等賞を獲得しました。」

学校から選ばれてショッツ鉄工所系列の事務所に入り、そこに数年間務めました。同事務所では、計算の知識を生かして実際に仕事をしたことで、学校の演習だけでは習得できないような正確な計算力を身につけることができました。

一家がグラスゴウに転居してからすぐ、同市で最大の会社の一つで応用工学の知識を習得しました。⁽⁴²⁾

応用工学の知識を習得できた、グラスゴウで「最大の会社の一つ」というのは、ジェイムズ・エイトキン社という鑄物工場であって、ダイアーは一八六三年、一五歳のころ、同社の徒弟に入っている。ダイアーを指導したのは

同社の工場長 A・C・カーク (Alexander C. Kirk, 1830—1892)⁽⁴³⁾ であって、かれはダイアーを高く評価していた。

「ダイアー氏にはすぐれた能力と知性がみられましたので、機械組立工むけに鋳物などで作った製品の図面を描くのにしばしばかれを使いました。徒弟修業の終わりころには製図室で働いてもらいましたが、かれは勤勉かつ集中力がありましたので、急速な上達をみせました。堅実さ、辛抱強さ、工学の研究能力、職工としての資質を高く評価するものであります。」

「謹厳で、堅実で、注意深い」人柄であるうえに、「職工として腕が立ち、学究的であつたので、前途はおおいに有望である」とも称えている。⁽⁴⁴⁾

同社の職工長の T・ケネディ (Thomas Kennedy) も、同じようにダイアーを称賛し、

「徒弟修業の最後の年は、わたしの助手として働かせ、設計をさせたり、組立工と機械工に進む仕事をさせていました。優れた知性と能力がありましたので、ほかの徒弟よりも高い給料を支給されました。」

と述べている。「おこないは実に模範的でありました。腕がよくて、まじめで、堅実で、勤勉な職工でありました」という評価も残している。⁽⁴⁵⁾

五 夜間学級

ジェイムズ・エイトキン社での徒弟修業中に夜学に通っていた、ということも特筆される。アンダソン・カレッツの夜間学級であつて、グラスゴウ市庁舎のすぐ北側にあつた。一七九六年の開校以来、働らきながら学ぶ意欲を

もった人たちの学習拠点として、伝統と実績のある学校であり、現在はストラスクライド大学になっている。⁽⁴⁶⁾

このアンダソン・カレッジに対し、ダイアーは少年のころから強い関心をもっていた。そもそものはミアマドキン村にいたところに、地元の牧師から同カレッジ出身者の出世話を聞く機会があつて、強い感銘をうけたのだった。

化学者T・グレアム (Thomas Graham, 1805—1869)、探検家D・リヴィングストン (David Livingstone, 1813—1873)、石油製造技術の開発者J・ヤング (James Young, 1811—1883) の三名についての話である。はじめてグラスゴウに出かけたときなど、ダイアーは真つ先にジョージ通にあつた同校にむかい、その博物館を見学してきた。⁽⁴⁷⁾ 「それから数年後、徒弟修業を完成するためにグラスゴウに転居したとき、はじめてその夜間学級に出席する機会をえた」とダイアーは回顧している。⁽⁴⁸⁾ 将来を見すえて、堅い決意で通つたにちがいない。

もつとも、そのころ同校は、初等数学のほかには化学、自然哲学、天文学、生理学、植物学についての「大衆むけ講義」が開かれていたが、「工業や産業全般に対する応用については、この夜間学級ではまったくあげられなかった」と、ダイアーは伝えている。⁽⁴⁹⁾

徒弟期間が満了すると、今度はいよいよグラスゴウ大学に進んだ。一四五一年創立という歴史の古い大学だが、教養主義重視から実学重視の大学に変容し、一八四〇年にはどこよりも早く土木・機械学講座を開設していた。一八七〇年の秋には、ハイストリートの旧キャンパスから現在地のギルモアヒルに移転した。⁽⁵⁰⁾ このグラスゴウ大学に一八六八年から五年間学んだが、その間にも「夏期には作業場や設計事務所で働いたし、時々アンダソン・カレッジの夜間学級に出て補足の学習もした」という。⁽⁵¹⁾ 理論学習だけでなく、ひきつづき実習体験を重視していたのである。

アンダソン・カレッジは、その夜間学級に通つたということのほかに、もう一つ、ダイアーにとって重要ななか

わりがある。幕末に英国へ密航した日本人留学生の一人で、のちに工部省の要職をしめる山尾庸三（一八三七—九一七）と同窓であったという点である。ダイアーは自著『大日本』（一九〇四）で、つぎのように回想している。

「私にとってうれしい驚きだったのは、伊藤博文氏の後任として工部大輔を務めていた山尾庸三氏は、実はかつてグラスゴウのアンダーソン・カレッジ（のちのグラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジ）の夜間クラスで見かけたことのある人物だったということである。当時の山尾氏は、グラスゴウのネイピア造船所で造船技術を実地に学んでいた。山尾氏がグラスゴウに滞在中、私はとくに個人的なつきあいがあったわけではないが、同じ時期にともにグラスゴウで暮らしていたということだけで、私たちはお互いに意気投合したものである。

……私の提案した技術者養成計画に山尾氏は心から賛意を表してくれ、何事につけみずから進んで可能な限りの親切な配慮を惜しまなかった。のちに『工部大学校』と呼ばれるようになる工学寮カレッジ（工学校）が成功を収めたのは、ほかならぬ山尾氏の努力に負うところがまことに大きい⁵²。」

アンダーソン・カレッジの同窓生である山尾の支援をうることができたことで、工部大学校における経営と教育が「成功を収めた」というのである。

六 グラスゴウ大学ホイットワース奨学生

(一)

ダイアーは、「徒弟修業をつとめあげたあとすぐ⁵³」、一八六八年にグラスゴウ大学へ全日制学生として入学した。

このとき、かれは『グラスゴウ大学学生名簿』に、ヘンリー・ダイアー二〇歳、出生地ラナークシャ、父の名前はジョン、職業はエンジニアと自筆で書き入れている。以後、卒業する一八七二年度まで、同名簿における記述内容はほぼ変わりがなく、父の職業欄には、前述のように、いずれも「エンジニア」と届けている⁵⁴。

一八六八年度から一八七二年度までの在学中、ダイアーが受講した科目・コースは、『グラスゴウ大学受講記録一覧』から抜き出すと、下表のとおりである⁵⁵。五年間の在学中の前半には自然科学系の、後半になると人文教養系の科目を重点的に受講していることが注目される。

ダイアーが受講した科目・コースだけでなく、受講成績についても興味をもたれる。この受講成績については、二つの資料がある。

第一は毎年刊行される『グラスゴウ大学要覧』であつて、開講科目ごとの沿革・教授陣・授業概要のほかに、奨学金ならびに成績優秀者とそれぞれの受賞者の氏名が記載されている。同資料から、ダイアーの受賞記録を抽出してみると次表のとおりである⁵⁶。成績は優秀であり、ワット賞を受けたほか、一年次からかずかずの褒賞に輝いている。

最終学年の一八七二年に、グラスゴウ大学では工学を専攻する学生に学位取得の道がはじめて開かれることになつ

1868年度	物理学 (Physica) 数学 上級コース (Mathematica-Seniore)
1869年度	物理学 (Physica) 機械学 (Scientiae Machinalis)
1870年度	ラテン語 初級コース (Latina-Juniores) ギリシャ語 初心者コース (Graeca-Tyrones) 機械学 上級コース (Scientiae Machinalis-Seniore)
1871年度	ラテン語 上級コース (Latina-Seniores) ギリシャ語 上級者コース (Graeca-Provectiores) 物理学 (Physica) 博物学 動物学コース (Natural History-Zoology)
1872年度	倫理学 (Ethica) 論理学 (Logica) 国語・国文学 (English Language and Literature)

た。このとき、ダイアーは同大学で最初の理学士号取得者の一人となつた。^(註)

受講成績にかかわる第二の資料として、ダイアー自身がまとめた記録がある。『推薦書・成績証明書一覧』とでも称するわずか一六頁の小冊子であつて、左記のような題名から、工部大学の都検（教頭）職に応募するさいに作成したと考えられる。

Selections from Testimonials presented by Henry Dyer, C. E., On the Occasion of His Appointment as Principal of the Imperial College of Engineering, Tokio, Japan. February, 1873.

本冊子には、在学中に取得した「学位ならびに褒賞一覧」、「グラスゴウ大学工学資格証明書」、恩師のW・J・M・ランキン(William John Macquorn Rankine, 1820—1872)教授の作成による「一八六九年度グラスゴウ大学土木学・機械学クラス成績証明書」および「一八七〇年度グラスゴウ大学土木学・機械学クラス成績証明書」、それにランキン教授や、先に紹介した徒弟修業時代の指導者T・ケネディ、あるいはA・C・カークなどから寄せられた一〇件の推薦書が収められている。

これによると、ダイアーは、工学資格証明書取得要件である、数学、自然哲学、無機化学、地質学・鉱物学、土木・機械学を受講し試験に

1868年度	数学 上級コース・クラス投票部門二番 [クラス優等賞] 数学 上級コース・筆記試験部門三番 自然哲学 実習・筆記試験部門二番
1869年度	土木工学・機械学 製図部門 [クラス優等賞]
1870年度	土木工学・機械学 筆記試験部門一番 [ウォーカー賞] 土木工学・機械学 製図部門 [クラス優等賞] 工学技能証明書 (Certificate of Proficiency in Engineering Science)
1871年度	実験物理学 [アーノット賞] 自然哲学 高等数学部門一番
1872年度	最優秀論文賞 [ワット賞]: 題目『18世紀における科学の進歩に対するニュートン原理の影響』

合格したし、製図技術についても認定を受けた。また、グラスゴウ大学文学修士号および理学士号、工学資格証明書、さらにはホイットワース給費生、ホイットワース奨学生、アーノット賞（自然哲学）、ウォーカー賞（工学・造船学）、ワット賞（天文学）、トムソン奨学生（実験科学）、ウィリアム・トムソン卿上級数学クラス一等賞といった学位取得ならびに褒賞の記録も掲げられている。⁵⁸一八六九年度グラスゴウ大学土木学・機械学クラス成績証明書には、受講状況は「すべてきちんと出席」、口頭試験「優」、筆記試験「最優秀、一〇〇点」、所見「どの点でも能力・成績抜群の学生」とあり、また、一八七〇年度の同成績証明書でも、受講状況「すべてきちんと出席」、口頭試験「優」、筆記試験「最優秀、一〇〇点」、所見「とびきり成績抜群の学生。筆記試験の部で最初のウォーカー賞受賞者。九五・五点」とある。⁵⁹

以上のように、ダイアーは徒弟に入って実地に修業したうえに、グラスゴウ大学で自然科学ならびに人文諸学を学んで学士号を取得したという経歴の持ち主であった。しかも、徒弟修業においても学業においても成績は優秀であり、性格・才能・学識についてもまた高い評価をうけており、ランキン教授は工部大学校の都検職としてダイアーを推薦したのであった。理論的学習と実務の両方に秀でていたというのだから、まさに当時の日本が求めていた人材であったといっていであらう。

(三)

グラスゴウ大学時代の受賞記録のなかでも、ホイットワース奨学生に選ばれたことは、ダイアーにとって大きな誇りであった。同奨学金を管理する英国政府の科学技芸局書記官あてに、同大学三年生であった一八七〇年の一月一日付で作成した計画書を、同年九月二六日付の決定通知書とともに、前出の『推薦書・成績証明書一覧』に収

録している。それは、ランキン教授と相談してまとめた「ホイットワース奨学金を受給する三年間の履修計画」であつて、左記のように、幅の広い学習を志向していたことがうかがわれる。

「技師および製図工として七年間ほどの実習体験がありますので、今後三年間は、そのほとんどを一般教育を修了し、もつぱら理論的学習にあてるつもりであります。

工学資格証明書の取得に必修であるグラスゴウ大学工学課程を修了するとともに、文学修士号を取得できる授業を受けるつもりであります。

教養課程では、古典および哲学には学位取得に必要な時間をあてるだけにして、工学、数学、自然哲学の履修にできるだけ時間を充てたいと思います。

このようにして、十分な一般教育を受けるつもりです。それから、ラテン語を履修したあと、重要な手段となる現代語を急いで履修することができると思います。

教養課程を修めたあととは、資格試験で古典および哲学の知識を必要とする学位の取得へむけて進むつもりでありますし、また英国学士院の造船学修了証書の取得をめざして挑戦するつもりであります。⁶⁰

ここには、エンジニアという専門職は専門分野の学力と実務能力だけでは十分でなく、広い教養教育もさらに必要であるというダイアーの教育観⁶¹が、すでにあらわれている点が注目される。

工部大学校という工学専門教育機関では、士族出身の学生が多く、ともすれば実務を軽視する傾向がみられたし、専門職はとかく思想や行動の偏狭さに陥りがちになるであろうから、この教養教育を重視するという観点は重要な意味をもつ。工部大学校の都検職にあつたときも、また帰国してからも、ダイアーは機会をとらえて「エンジニアに教養教育が必要である」ことを主張し、「専門職の教養化」を説いたことは、三好信浩『ダイアーの日本』⁶²などに

詳しい。

七 「努力立身」の生涯

「工部大学校お雇いスコットランド人教師ヘンリー・ダイアー」と題する本稿では、ダイアーは「鍛冶屋の子より努力立身の人」という、同校出身者の回想記にみられる言辭に注目して、お雇い教師として招へいされるまでの、いわば前半生を主たる対象とし、かれの家族の素姓・住所・教育歴をめぐって考察した。

『国勢調査』、ダイアー編『推薦書・成績証明書一覧』に収められた学生時代までの生活と学習にかかわる文書、グラスゴウ大学生時代の関係文書（『受講記録一覧』あるいは『学生名簿』など）をおもな資料として具体的に分析をすすめる、以下の諸点を明らかにした。第一に、ダイアーの父はアイルランドの出身であり、働き口とよい暮らし向きを求めてグラスゴウに移住してきた。『国勢調査』の職業欄には「製造場の労働者」あるいは「機械整備工」などとあるが、比較的低給の不熟練労働者であったと思われる。ショッツ鉄工所をはじめ勤め先を求めて、グラスゴウ近郊のミアマドキン、ホリータウン、ショッツ、それからグラスゴウ市内へと何度か転居している。

第二に、このような生活環境のなか、ダイアーは実務への関心を強めたもようである。ジェイムズ・エイトキン社の鑄造所で徒弟修業を体験した。また、スコットランドの民主的な教育制度のもと、早くから学習機会を享受することができた。まずショッツ鉄工所に付設された小学校に学び、すばらしい学業成績を残した。さらに徒弟修業の間中は、勤労者の学習の拠点であったアングソン・カレッジの夜間学級に学んだ。日本の工業化を導く知識と経験

を求めて留学していた山尾庸三がこの夜間学級に学んでいたという縁から、日本に招へいされ工部大学校の経営と教育をまかされたとき、山尾の全面的な支援をうることができた。

第三に、徒弟となつて実地修業を終えたあとは、一八六八年にグラスゴウ大学に全日制学生として入学し、実に称賛に値する修学成績を残した。五年間の在学中の前半はおもに自然科学を、後半は幅広い人文教養系を中心に履修したが、輝かしい成績を修めたことで数多くの受賞に輝き、奨学金をえて勉学に励むことができた。なかでも貧しい技術者の高等教育への道を拓いたホイットワース奨学生に選ばれたことは、ダイアーの誇りであった。徒弟修業においても大学での学業においても成績は優等であったことから、恩師ランキン教授の推薦により工部大学校の都検職へ送り出されたし、推薦者に名をつらねた人たちからは性格・才能・学識について高い評価をうけた。

要するに、「ヘンリー・ダイアー家の出は低く、ダイアー自身の家柄は裕福な家でも名家でもなかった」。それでも、成績優秀によつて奨学資金を活用することができたことで、アンダソン・カレッジの夜間学級に加えて、グラスゴウ大学の全日制学生として修学した。徒弟として実地修業をした体験者でもあった。ダイアーは「努力立身の人」であつたのである。⁽⁶³⁾

注

(1) 三好信浩『日本教育の開国、外国教師と近代日本』福村出版、一九八六、一一五頁。

(2) 同右、「II 外国教師と近代学校——学校組織の近代化」参照。それぞれの領域で活躍した主たるお雇い教師について、略述されている。

(3) 三好信浩『日本工業教育成立史の研究——近代日本の工業化と教育』風間書房、一九七九、第五章「工部大学校の工業教育」

その他、参照。

- (4) 賞勳局編『外国人叙勲録』賞勳局、一八九二、二六七頁。ここには、明治二五（一八九二）年一月一日現在で、三二か国のべ一四七名におよぶ外国人の氏名があがっている。拙稿「日英交流の推進者ヘンリー・ダイアーの叙勲」『日本古書通信』八七九号（二〇〇二年一〇月一五日）二〇―二二頁参照。
- (5) 「英国人ヘンリー、ダイエル江勲章ヲ賜リ度儀ニ付伺」および「ヘンリー・ダイエル氏奉職履歴概略」、梅溪昇編『明治期外国人叙勲史料集成』第一巻、思文閣出版、一九九一、二八一―二八二頁より再引。
- (6) 「北米合衆国人オノラブル、チャールズ、エス、フエヤチャイルド外九十八名叙勲ノ件」、同右、第四巻、四二六頁より再引。
- (7) 岩田武夫「旧工部大学校史料参考記事」、旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校史料附録』虎之門会、昭和六、二二頁所収。
- (8) 石橋絢彦「回顧録（其の二）」同右、一三二―一三三頁所収。
- (9) *Oxford Dictionary of National Biography*, Vol. 58 (2004) pp. 786-789. Dyer, H., "John Elder" *Chair of Naval Architecture and Marine Engineering, Glasgow University, 1886*, [1886], p. 13. 三好信浩『ダイアーの日本』福村出版、一九八九、六〇頁。創設の経緯と規程、受賞者の氏名と略歴などについては、Low, D. A. ed., *The Whitworth Book, Prepared by the Whitworth Society*, Longmans, London & N. Y., 1926, などに詳しい。同書によれば、ダイアーは、一八六八年に「ホイットワース育英資金 (exhibitions)」(25ポンド) 受給者に、一八七〇年には「ホイットワース奨学金 (scholarships)」受給者に学生部門ではなくて労働者部門で選ばれた (pp. 32, 34, 151)。
- (10) 石橋絢彦「回顧録（其の二）」前出、一一五頁。
- (11) Smiles, S., *Self-Help, with Illustrations of Character and Conduct*, John Marry, London, 1859. 斯邁爾斯（中村正直訳）『西国立志編原名・自助論』須原屋茂兵衛、東京、明治三。S・スマイルズ（竹内均訳）『自助論』三笠書房、一九八八、二四四頁。国立志編原名・自助論』須原屋茂兵衛、東京、明治三。S・スマイルズ（竹内均訳）『自助論』三笠書房、一九八八、二四四頁。
- (12) 『グラスゴウ大学登録簿』の一八六八年度版 (*Glasgow University Album, Session 1868-69*) には、登録簿番号「三五六」、氏名「Henry Dyer」、年齢「二〇」、出生地「Lanarkshire」、父のクリスチャンネーム「John」、父の職業「Engineer」、学習分野「Arts」、学年は「一」年とある。ちなみに、在学中の『登録簿』（グラスゴウ大学アーカイブズ蔵）における記載内容は、次

表のとおり。

- (13) Hart, L. & Hunter, R., "Henry Dyer — A Man with a Mission", *The Henry Dyer Symposium (Tokyo)*, March 18・19, 1997, The University of Tokyo, School of Engineering, p. 43. 拙稿「ヘンリー・タイラー・シンポジウム」, 名古屋大学教育学部教育社会史研究室『教育社会史研究室年報』第三号(一九九七年十一月)五八頁。
- (14) 1841 Census, Parish of Cambusnethan. Wishaw, Scotland.
- (15) 『一八四一年国勢調査』では「Army P.」つまり「軍人恩給受給者 Army Pensioner」とある(1851 Census, op. cit.)が、長男ジョンの『死亡証明書』では「鉄工所の溶鉱炉番 Furnace Keeper in Iron Works」である(1891 Deaths in the district of Partick in the County of Lanark, No. 589)。
- (16) 1851 Census, Parish of Bothwell, Village of Muirmadkin, No. of House-holder's Schedule 32, Scotland.
- (17) マーガレット・タイラーの「死亡証明書」には「父 R・モートン(Robert Morton)の職業は「農夫兼配達人(Farmer and Carrier)」である(1907, Deaths in the District of Partick in the County of Lanark, p. 211)。「おまじ」Hunter, R., "Henry Dyer (1848-1918)", <http://www.monklands.co.uk/shotts/> (二〇〇四年八月二六日)。
- (18) 1851 Census, op. cit. ちなみに『一八五一年国勢調査』におけるタイラー家の記載内容は別掲の表のとおり。
- (19) Wilson, R., *Bygone Bellshill*, Richard Stenlake Publishing, Ochiltree, 1995, p. 3.
- (20) Cormack, I. L., *Old Bellshill: with Mossend, Holytown and New Stevenston*, Ian L. Cormack, Glasgow, 1981, p. 4.

学年	登録簿 番号	氏名	年齢	出生地	父の名前	父の職業	専攻領域
1	356	Henry Dyer	20	Lanarkshire	John	Engineer	Arts
2	372	Henry Dyer	21	Lanarkshire	John	Engineer	Arts
3	312	Henry Dyer	22	Lanarkshire	John	Engineer	Arts
4	381	Henry Dyer	23	Bothwell	John	Engineer	Arts
5	1120	Henry Dyer	24	Bothwell Lanarkshire	John	Engineer	Arts

- (21) 『一八六一年国勢調査』に「タイアーの次兄 (Robert Dyer 当時五歳) の出生地がラナークシャーのホリタウン (「Lanarksh. Holyton」) とある。1861 Census, Parish of Cambusnethan, No. of Schedule 135.
- (22) Muir, A., *The Story of Shotts: a Short History of the Shotts Iron Company Limited*, The Shotts Iron Company Limited, Edinburgh, [1952] pp. 1-2. 『シャッツ』 “Shotts, A Village Built on Coal and Iron”, <http://www.monklands.co.uk/shotts/> (11 〇〇四年八月二十六日)。
- (23) Hart, L. & Hunter, R., *op. cit.*, p. 43. 拙稿「クンリー・タイアー・シンボジウム」前出 五八頁。
- (24) Muir, A., *op. cit.*, pp. 11-12.
- (25) Hart, L. & Hunter, R., *op. cit.*, p. 43. 拙稿「クンリー・タイアー・シンボジウム」前出 五八頁。
- (26) *Ibid.*, pp. 43-44. 拙稿「クンリー・タイアー・シンボジウム」同右 五八―五九頁。
- (27) Cooper, J. N., *Simply Anderston: the Story of a Glasgow Burgh*, Vista of Glasgow, Glasgow, 1979, p. 27.
- (28) 1861 Census, Parish of Cambusnethan, No. of Schedule 135, *op. cit.*
- (29) 1871 Census, Civil Parish of Barony, Parliamentary Burgh of Glasgow, No. of Schedule 101.
- (30) 1881 Census, Ref. No. 609880, Barony, Lanark, Scotland (General Register Office for Scotland, *FHL Film 0203661 GRO Ref Volume 644-9 EnumDist 27*, p. 1 46の再記)。
- (31) “Lenzie (Local History)”, “Commuting to Glasgow (Local History)”, <http://www.eastdunbarton.gov.uk/> 46。
- (32) マリーとは、来日した翌一八七四年の五月二三日に横浜で結婚した。彼女は、グラスゴウ市ベズリー通ハンブロック・テラス八番地のD・ファーンクソン (Duncan Ferguson) の長女 (*The Glasgow Herald*, 9 June 1874, p. 1. *Marriage Solemnized at Her Britannic Majesty's Legation at Yokohama*, 23rd May 1874. 拙稿「クンリー・タイアーの結婚」『D』三〇四号、一九九八年二月、一六―二〇頁、参照)。彼女は英領植民地セントルメン生まれ (1891 Census, Civil Parish of Govan, Parliamentary Division of Partick, Lanarkshire, No. of Schedule 168, Scotland)。¹⁾ 父D・ファーンクソンは金細工人もしくは自営の宝石細工人であった(タイアーとの『結婚証明書』には父の職業は「Goldsmith」[*Marriage Solemnized at Her Britannic Majesty's Legation*

- at Yokohama, 23rd May 1874, op. cit.]。一方、父の『死亡証明書』には「Jeweller (Master)」とあり [1875 Deaths in the District of Govanchurch in the County of Lanark, No. 71]。
- (33) タイラー家の住所は、『郵便局台帳一八八四年度版』レンジイ篇』では「Dumrowan, Lenzie」それが『郵便局台帳一八八六年度版』グラスゴウ篇』から「8 Highburgh Terrace, Partick」に移ったこと (Post Office Lenzie Directory for 1884-1885, William Mackenzie, Glasgow, 1884, p.1198. Post Office Glasgow Directory for 1886-1887, William Mackenzie, Glasgow, 1886, p. 749)。
- (34) 拙稿「日英交流の推進者ヘンリー・タイラーの墓碑銘」、日本英学史学会『英学史研究』第三十六号(二〇〇三年一〇月)五七―七二頁参照。
- (35) 田邊朔郎「元工部大学校都検タイラー先生を訪ふ」『工業の大日本』第一巻第五号(明治三十七年二月)三〇頁。
- (36) 1891 Census, Civil Parish of Govan, Parliamentary Division of Partick, Lanarkshire, No. of Schedule 168, Scotland. 『一九〇一年国勢調査』p. 67. 窓付き部屋数は一三室 (1901 Census, Partick, Civil Parish of Govan, Parliamentary Division of Lanarkshire, No. of Schedule 57, Scotland)。ちなみに、『一九〇一年国勢調査』におけるタイラー家の記載内容は、別掲の表のとおり。
- (37) Charle Henry (1876-1950), Robert Morton (1878-1936), James Ferguson (1880-1940), Marie Dyer (1882-1958)。タイラー夫妻には、日本滞在中の一八七五年七月二二日に第一子(John Ferguson)を授かったが、同年十一月二六日に死去した。The Daily Advertiser (14 July 1875) p. 2, および (27 November 1875) p. 2.
- (38) 1891 Census, op. cit.
- (39) 拙稿「ヘンリー・タイラーと田邊朔郎」『UP』三四〇号(二〇〇一年二月)六一―二頁。中西洋『日本近代化の基礎過程』下、東京大学出版会、二〇〇三、四五四―四五五頁。そのほか、藤田重道(工部大学校の卒業生。当時は日本鉄道の汽車課長)は明治二九(一八九六)年に訪問した。石河幹明『福沢諭吉伝』第四巻、岩波書店、一九三二、六七〇―六七二頁より。
- (40) 拙稿「明治期におけるグラスゴウ大学日本語資格試験」、篠田弘・鈴木正幸編『教育近代化の諸相』名古屋大学出版会、一九九

二二〇—二二二頁所収。拙稿「日英交流の推進者ヘンリー・タイアの叙勲」前出、二〇—二二頁。三好信浩『タイアの日本』前出、VおよびVI、その他参照。

(41) 『国勢調査』におけるタイア一家の住所（一部）をまとめてみると、つぎのとおりである。

一八四一年 Wishaw, Parish of Cambusnethan, Ireland.

一八五一年 32 Edinburg Road, Village of Muirmadkin, Parish of Bothwell, Glasgow, Scotland.

一八六一年 135 Springhill, Village of Stane, Parish of Cambusnethan, Glasgow, Scotland.

一八七一年 449 St. Vincent St., Civil Parish of Barony, Parliamentary Burgh of Glasgow, Scotland.

一八八一年 128 Dumbarton Rd., Barony, Lanarkshire, Scotland.

一八九一年 8 Highburgh Terrace, Glasgow, Scotland.

一九〇一年 8 Highburgh Terrace, Glasgow, Scotland.

一九一一年 8 Highburgh Terrace, Partick, Glasgow, Scotland.

(42) “From Mr. Robert M’Nab, F. E. I. S., Wilson’s School, Shotts Iron Works”, in Dyer, H., *Selections from Testimonials Presented by Henry Dyer, C. E., On the Occasion of His Appointment as Principal of the Imperial College of Engineering, Tokio, Japan*, February, 1873, p. 16.

(43) 当時「カークは、ネイピア造船所で徒弟修業を終えた新進気鋭の技師であった」（北政巳『国際日本を拓いた人々——日本とスコンターメントの絆』同文館一九八四、二九頁）。ほかにも“Kirk, Alexander Carnegie”, in F. Boase, *Modern English Biography*, Vol. II (1965) p. 243.

(44) “From A. C. Kirk, Esq., Memb. Inst. C. E., &c.”, in Dyer, H., *Selections from Testimonials Presented by Henry Dyer, C. E., On the Occasion of His Appointment as Principal of the Imperial College of Engineering, Tokio, Japan*, op. cit., pp. 14-15.

(45) “From Thomas Kennedy, Foreman to James Aitken & Co.”, in *ibid.*, p. 14. Dyer, H., “John Elder” Chair of Naval

- Architecture and Marine Engineering, Glasgow University, 1886.* op. cit. に於ては、シエイマス・エイトキン社で徒弟修業をこなしたリビア記述 (pp. 5, 15)。
- (46) Butt, J., *John Anderson's Legacy, The University of Strathclyde and its Antecedents 1796-1996*, Tuckwell Press, East Linton, 1996; 拙著『英国メカニックス・インスティテュートの研究——生成と発展——』神戸商科大学経済研究所 一九八七第一章'参照。
- (47) Dyer, H., "The Training and Work of Engineers in Their Wider Aspects: Introductory Address; by Henry Dyer, Glasgow Technical College Scientific Society, October 21st 1905", *Transactions of Glasgow Technical Scientific Society, Vol. 2 (1905-06)* p. 5: do., *Introductory Address on the Training and Work of Engineers in Their Wider Aspects*, Technical College, Glasgow, 1905, p. 5. 本件は'三好信浩『マイヤーの日本』前出'六三頁に既出。
- (48) *Ibid.*
- (49) *Ibid.*
- (50) Brown, A. L. & Moss, M., *The University of Glasgow: 1451-1996*, John Smith & Son, Glasgow, 1996, 参考。
- (51) Dyer, H., "The Training and Work of Engineers in Their Wider Aspects: Introductory Address; by Henry Dyer, Glasgow Technical College Scientific Society, October 21st 1905", *op. cit.*, p. 6.
- (52) Dyer, H., *Dai Nippon, the Britain of the East, a Study in National Evolution*, Blackie & Son, London, 1904, pp. 2-3: 平野勇夫訳『大日本'技術立国日本の恩人が描いた明治日本の実像'実業之日本社'一九九九'三三—三四頁。
- (53) Dyer, H., "John Elder" *Chair of Naval Architecture and Marine Engineering, Glasgow University, 1888*, op. cit., p. 5.
- (54) *Glasgow University Album, Session 1868-69, 1868: Glasgow University Album, Session 1869-70, 1869: Glasgow University Album, Session 1870-71, 1970: Glasgow University Album, Session 1871-72, 1871: Glasgow University Album, Session 1872-73, 1872.* すべてグラスゴウ大学アーカイブズ所蔵。
- (55) *University of Glasgow, Class Catalogue Session 1868-69*, Glasgow, Robert Maclehose & Co., 1868, pp. 17, 19: *University*

of Glasgow, Class Catalogue Session 1869-70, *ibid.*, 1869, pp. 17, 22 : *University of Glasgow, Class Catalogue Session 1870-71, ibid.*, 1870, pp. 6, 13, 23 : *University of Glasgow, Class Catalogue Session 1871-72, ibid.*, 1871, pp. 8, 11, 18, 41 : *University of Glasgow, Class Catalogue Session 1872-73, ibid.*, 1872, pp. 14, 16, 23. すべてケルソウ大学アーカイブス所蔵。

- (95) *The Glasgow University Calendar for the Year 1869-70*, James Maclehorse, Glasgow, 1870, pp. 135-137 : *The Glasgow University Calendar for the Year 1870-71*, 1871, p. 142 : *The Glasgow University Calendar for the Year 1871-72*, 1872, p. 152 : *The Glasgow University Calendar for the Year 1872-73*, 1873, pp. 155, 168 : *The Glasgow University Calendar for the Year 1873-74*, 1874, p. 165. ドット賞受賞論文は“The Influence of the Newtonian Principles on the Progress of Science during the Eighteenth Century”. ケルソウ大学アーカイブス所蔵。表中「ケルソウ優等賞」とは受講生の投票による受賞。

- (96) *The Glasgow University Calendar For the Year 1872-73*, James Maclehorse, Glasgow, 1872, Appendix 1. Dyer, H., “John Elder” Chair of Naval Architecture and Marine Engineering, *Glasgow University*, 1886, *op. cit.*, p. 6.

- (98) Dyer, H., *Selections from Testimonials Presented by Henry Dyer, C. E., On the Occasion of His Appointment as Principal of the Imperial College of Engineering, Tokio, Japan.* *op. cit.* 収録されたこの資料は、順に次のとおり。本冊には「三好信浩『タイアーの日本』前出」などいくつかの紹介がある。

- List of Degrees and Special Prizes,
- University of Glasgow, Certificate of Proficiency in Engineering Science,
- University of Glasgow, Class of Civil Engineering and Mechanics, Certificate of Attendance, Session 1869-70.
- University of Glasgow, Class of Civil Engineering and Mechanics, Certificate of Attendance, Session 1870-71.
- Testimonials.

なお、『ケルソウ・ヘラルド』紙上の追悼記事では「かれは教養課程の履修を優等で合格し、褒賞名簿に名前が二回でつづる」とあり、「Death of Dr Dyer—Notable Engineer and Educationist’, *The Glasgow Herald* (26 Sept. 1918) p. 4. Dyer, H.,

*John Elder's Chair of Naval Architecture and Marine Engineering, Glasgow University, 1886. Ibid. においても、ダイアー
みずから受賞記録を記している (pp. 5-6)。ただし、前出の『グラスゴウ大学要覧』の記録とは表記が異なるところがある。*

(59) Dyer, H., *ibid.*, pp. 4-5.

(60) *Ibid.*, pp. 12-13.

(61) 三好信浩『ダイアーの日本』前出、九一―九三頁など。

(62) 三好信浩、同右、九一―九三、一八四頁。同『日本工業教育成立史の研究——近代日本の工業化と教育』前出、二八九―二九〇頁。

(63) 本稿は、拙稿「『努力立身の人』ヘンリー・ダイアー」『東京大学史史料室ニュース』第三三号（二〇〇四年一月三〇日）―四頁所収、と重複するところがある。

（かとう・しょうじ 大学文書資料室）

Henry Dyer, Scottish Teacher at the Imperial College
of Engineering, Tokyo (Kôbu-Dai-Gakko)
—His Life toward Self-actualization—

Shoji KATOH

Henry Dyer (1848-1918) was invited to Japan from Scotland to be the Principal at the Imperial College of Engineering, Tokyo, during 1873 and 1882, and was the founder of engineering education in Japan. Among students, he had been said to be a “self-made man, the son of a foundry laborer”. I shall focus on this remark in this paper.

After closely analyzing such materials as the *Census, Selections from Testimonials* edited by Dyer, which cover his childhood and studies, and *Glasgow University Class Catalogues* and *Glasgow University Album*, I have ascertained the following points regarding the first half of his life—his family line, places where he lived, and educational history.

First, Dyer’s father was from Ireland, but emigrated to Glasgow in search of better work and a better life. His occupation listed in the *Census* was “foundry laborer” or “engine fitter”. He was an unskilled laborer who worked for relatively low wages. He worked for Shotts Iron Works and changed residences many times while looking for new jobs.

Second, while growing up in such a living environment, Dyer showed an interest in furthering himself, and he did an apprenticeship at the James Aitken & Co. foundry. Thanks to Scotland’s progressive and democratic educational system, he was able to take advantage early of the opportunity to study. First, he studied at the primary school attached to the Shotts Iron Works and achieved high grades. Then, during his apprenticeship, he took evening courses for workers at Anderson’s College (today the University of Strathclyde). Also studying in the same course was Yozo Yamao from Japan, a man seeking knowledge and experience to lead Japan’s industrialization. It is this connection that later benefitted Dyer’s successful management and curriculum development of the Imperial College of Engineering, Tokyo. He achieved this full support from Yamao, who happened to be a

high official of the Public Works Ministry.

Third, after completing his hands-on training as an apprentice, Dyer entered the University of Glasgow as a full-time student in 1868, leading an exemplary academic life. The first half of his five years of study during 1868-1873 he devoted to the natural sciences, and the latter half to a wide range of studies in the humanities. He won many awards for his stellar academic performance, and after receiving a scholarship, was able to continue to devote himself to studies. Among his achievements was winning the prestigious Whitworth Scholarship, given to financially needy prospective engineering students to allow them to continue on to higher education. Both in his apprenticeship and at university, Dyer's record was nothing short of top honors material. In recognition of this scholarship, and upon the recommendation of his mentor, Professor W. J. M. Rankine, he was dispatched as the Principal of the Imperial College of Engineering in Tokyo, receiving high praise from his recommender for his character, talent and academic record.

In a word, "Henry Dyer's family origins were humble and his background was not one of wealth or privilege." But his superior scholastic achievements and dispositions landed him a scholarship, and coupled with evening courses at Anderson's College, he was able to matriculate as a full-time student at the University of Glasgow. He had also gained practical training and experience through an apprenticeship. Henry Dyer was truly a self-made man.